

## あそびを取り入れた国語科教育について

永山 文子

## 序章 テーマ設定の理由

「国語科」は、話すこと、聞くこと、書くこと、読むことを最も培うことができる教科である。私は、これまで児童が国語科の授業に興味を持つにはどうすれば良いかということを考えてきた。児童の学習の土台をつくると言う、国語科教育の果たすべき責任が重く感じられるかもしれないが、土台にこそ楽しさを、と私は考える。

そう考えるようになったのは、教育実習での教材研究をしている時である。さて、児童が興味を持ち、楽しい授業をつくり出すには指導者側の工夫の一つとして、児童の好きなあそびを取り入れた授業展開をすることを提案する。教育実習では、第2学年国語科の『たんぼのちえ』(16時間扱い)を始めから12時間目まで授業させていただいた。詳しくは後から述べていくことにするが、12時間目の授業で“パズルクイズ”を取り入れると、児童たちの目は授業内容へとくぎ付けになった。それまでは、なかなか授業に集中できていない児童や、授業自体に参加できずにいたLD(学習障害児)の児童も積極的に発言し、作業を始めている。この出来事に感動した私は、もっとあそびを取り入れた国語科について調べたくなった。

## 第1章 国語科におけるあそび案

「ことは遊びを教室で愉しむ…このような動きが、ここ十年ほどの間に、たいへん活発になってきているように思います。一九九六年度から小学校で使われる国語の教科書にも、ことは遊びの作品がいく編が掲載されたり、言語事項の指導などにことは遊びの技法が援用されていたりします。」と向井吉人氏も述べられているが、現在、小学校で使われている教科書には、本当にあそび的要素を盛り込んだ内容が多く使われている。例えば、平成8年発行の『こくご二下赤とんぼ』(光村図書)では、言語事項の一つに「なかまの漢字」という単元があったのだが、平成13年発行のものでは「漢字ビンゴゲーム」といったあそびの技法を使った内容になっているのである。以上のことから、国語科におけるあそび的要素は注目されている。

小学校の授業展開例の本は、国語科だけでなく全ての教科について、様々な出版社から数多く出版されている。私は、国語科のあそび案を述べていく上で、そのうちの『授業でつかえる文学あそびベスト50』(上條晴夫著、民衆社)を基にすることにした。

## 1. ゲーム

## ① 題名コンテスト～作者になったつもりで～

作品の新しいタイトルを考えるゲーム。

- ② なりきり質問ゲーム～登場人物のつもりで～  
登場人物になりきって相手の質問に答えるゲーム。
- ③ ニュースキャスターゲーム～物語中の事件をクローズアップ～  
ニュース番組をまねた学習発表会。
- ④ 音読ダウト～まちがい探しゲーム～  
耳で聞き取るまちがい探しゲーム。
- ⑤ スタンドアップ～言葉探しゲーム～  
指定された言葉を探し出してなるべく早く立ち上がるゲーム。
- ⑥ ディベートあそび～意見を対立させて考える～  
ある問題を二者択一形式にして話し合うゲーム。高学年の児童には意見が分かれる箇所を  
探すという作業をさせる。

## 2. クイズ

- ① 小物クイズ～これは誰のもの？～  
作中の小物が登場人物の誰のものを当てるゲーム。
- ② 順番クイズ～作品バラバラ事件～  
作品中の文をバラバラにして順番を当てるクイズ。
- ③ 登場人物クイズ～それは誰のこと？～  
登場人物の情報を読んで誰かを当てるクイズ。
- ④ オノマトペクイズ～これは何の音？～  
作品中に登場するオノマトペが何の音かを当てるクイズ。
- ⑤ 場面クイズ～これはどこの文？～  
数字や小見出しで場面がはっきり分かれている作品を選び、その中から任意の文を選び出  
してどの場面に出てきた文か当てるクイズ。

## 3. 作文

- ① 変身作文～視点を変えて作品を書き直す～  
立場を変え、視点を変えて想像の世界を描く。
- ② 手紙作文～相手に語りかけるつもりで～  
登場人物に呼びかけるように手紙を書く。
- ③ わき役作文～複眼思考をきたえる～  
主人公以外の人物（わき役）の目で作文を書く。
- ④ 続き話作文～あの人は今～

作品の後日談を作文にする。

#### 4.アート

##### ① 紙芝居～詩を絵にしてみる～

音読することのできる連続マンガの紙芝居である。物語を紙芝居にしても良いが、本文が長いとなかなかたいへんである。詩であれば短文と絵による紙芝居を作ることができる。

##### ② BGM～朗読をする時に～

朗読するのにBGM付でやると盛り上がる。

以上、数ある中の国語科あそび案を抜粋した。内容によって対象学年に制限をしてあるが、あそびであっても児童の能力に合わせる必要がある。

あそび案にはそれぞれ何らかのねらいがあるが、それ以前に単元の目標を達成しなければならない。私は、教育実習において、国語科の目標に繋がるあそびを取り入れた授業を実践することができた。次に、その実践記録を示した。それを基に、国語科のあそびのもたらす効果を述べていこうと思う。

### 第2章 教育実習での授業実践『たんぼぼのちえ』から

#### 1.音楽に合わせてノリノリの子どもたち～研究授業で～

『たんぼぼのちえ』の7時間目が研究授業であった。「子どもたちが心から楽しめる授業づくり」を目指して始まった教育実習であるが、その目標によって、国語科の中にあそびが加わった授業がつくられていったのである。そして、試行錯誤しつつ、音楽を使うこと、子どもたちは体で表現することを取り入れてみることにした。

#### 第2学年国語科学習指導案（省略）の本時の指導

##### (1) 本時の目標

わた毛ができるころの花のじくが伸びていく様子を詳しく読み取ることができる。

##### (2) 展開（次ページ）

##### (3) 評価

わた毛ができるころのたんぼぼの様子を読み取ることができた。

以上が私の研究授業での指導案（省略）であるが、この授業の中であそびを取り入れたのは④の部分であり、第1章の4.アートの②BGMがもとになっている。TVドラマでBGMが流れると、更に感情を移入して視聴したという経験は、誰にでもあるだろう。音楽は、ただ音を楽しむだけでなく、このような効果をもたらしてくれる。ある情景を想像し、それを表現する時、BGMは知らず知らずのうちに子どもたちの心の中の、たんぼぼのせのびのシーンを盛り上げた

| 学 習 活 動 |   | 教 師 の 支 援  | 資 料                                  |
|---------|---|--|--------------------------------------|
| 導 入     | ①一つ目と二つ目の知恵の確認と学習の内容を知る。  | ・前時までの学習内容をカードにより振り返る。<br>・本時の学習のめあてを把握させる。  | ちえの短冊<br>カード<br>挿絵                   |
| 展 開     | ②教材文6段落・7段落を読む。<br>③プリント学習<br><br>「このころになると」の「このころ」とは、いつのころといっていますか。      | ・一文ずつ指名読みさせる。<br><br>・児童に考えさせ、発表させる。<br>・教師と一緒にみんなの考えをまとめ、ワークシートに記入させる。  | ワーク<br>シート                           |
|         | このころ、たんぼぼのようすは、どうなるといっていますか。<br><br>・考えをワークシートに記入する。                      | ・書けない児童には、「このころになると」の次に続く文に着目させる。<br>*机間巡視して、支援の手を差し伸べる。   | 問題<br>パネル                            |
| 開       | ・考えを発表し合う。(モデルを使って様子の説明をする。)<br><br>④たんぼぼになって「せのびをするように」ぐんぐんのびていく様子を想像する。 | *自信を持って発表するよう励ます。<br>*友達のと自分の考えを比べながら、発表を聞くことができるように支援する。<br>・種を休ませている様子、起き上がりぐんぐん伸びて「せのび」をする様子を音楽に合わせて身体表現させ、その時のたんぼぼの気持ちになりさせる。<br>*仲良く楽しく表現させる。 | たんぼぼの<br>モデル<br><br>CD<br>わた毛の<br>お面 |
| ま と め   | ⑤学習のまとめをする。<br>せのびをするのにはわけがあり、次時にそのわけを読み取っていくことを知る。                       | ・せのびしたたんぼぼの写真を提示し、次時の学習への興味を持たせる。  | たんぼぼの<br>写真                          |

のである。私は、この授業で音楽を取り入れて正解だったと思った。使ったBGMは、ロシミ作曲の歌劇「ウイリアムテル」序曲の中の『静けさ』という曲である。この曲は、たんぼぼがぐんぐんせのびする様子を表現するのに最も適していると直感し、即決した。これから、指導案の展開部④の流れと子どもたちの反応を述べようと思う。

「目をつぶりましょう。今からみんなはたんぼぼさんです。」こう言うだけで、もう子どもたちは、何が始まるのかとウキウキである。「たんぼぼさんはおしゃべりできませんよ。」と注意すればたちまち教室は静かになる。

「まずは、たんぼぼの一つ目ちえ、たねを休ませている所です。」子どもたちは、いろいろな格好をしている。机に頬をつけている子。床に横になってしまっている子。両手を合わせてたんぼぼのじくを表している子。

「それではいきますよ。」

ここで音楽を流すと、25本のたんぼぼは、そーっとゆっくり伸び始めた。音楽に合わせて、思い思いにたんぼぼの様子を表していたのである。音楽を止めると、

「先生、もう一回！」

と子どもたちのなんと楽しそうな声が出た。その声に答えて何も言わずに同じ音楽を流すと、子どもたちは、少々笑い声をこぼしながらそれでもおしゃべりせず、真剣に楽しそうにせのびしている。今度は、自分が一番高い所までせのびするぞと椅子の上に登っている子が

いる。かかとを上げて一生懸命にせのびをしている子もいる。「このころ」というのは「わた毛ができるころ」であり、両手を合わせてそのたんぼぼのじくを表している。こちらを負けずにと下敷きで子どもたちの方を扇いでみた。

「風が吹いてきたよー。」

ここで二つ目のちえの確認もしつつ、子どもたちの中には手をわた毛のようにふわふわとさせている子もいる。すっかりたんぼぼの気持ちになりきった子どもたちに次のような質問をした。

「どんな気持ちになりましたか。」

すると、子どもたちは、

「楽しかった!」「疲れたー。」「涼しかったぁ。」「風が当たって気持ちよかったー!」

という素晴らしい意見であった。この答えから、子どもたちは、わた毛ができるころにせのびをする様子をよく捉えていたのではないかと思う。

## 2. 子どもたちの興味をつかんだパズルゲーム

教育実習最後の国語科の授業は、一時間目から授業をさせていただいた『たんぼぼのちえ』の12時間目となった。前時で四つ目のちえを読み取り終わったところであり、本時は、あそび的要素を盛り込んだ、四つのちえをまとめようと決めていた。

『たんぼぼのちえ』の副題は「じゅんじょに気をつけて読もう」である。そして、第1学年及び第2学年の「C読むこと」の目標は「書かれている事柄の順序や場面の様子などに気付きながら読むことができるようにするとともに、楽しんで読書しようとする態度を育てる。」とある。この時期の学習で大事なものは、「時間的な順序、事柄の順序などを考えながら内容の大体を読むこと」(「C読むこと」②内容イ)である。あそび的要素を盛り込むといっても、単なるあそびであってはならないということは、前にも述べた。

それでは、どのようにするか。ここでは、第1章の2.クイズ②の順番クイズを応用することにした。作品をバラバラにするのではなく、四つのちえをまとめた四枚のカードを、文章の順序がバラバラになるように配置し、切り取って張り付けるという作業を行うようなプリントを使用した。

### 第2学年国語科学習指導案(省略) 本時の指導

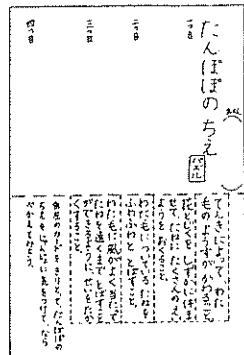
#### (1) 本時の目標

たんぼぼは、ちえを働かせて仲間を増やしていることが分かり、順序に気を付けて整理することができる。

#### (2) 展開(次ページ)

#### (3) 評価

たんぼぼは、仲間を増やすために工夫していることが分かり、順序



| 学 習 活 動 |  | 教 師 の 支 援  | 資 料              |
|---------|--|--|------------------|
| 導 入     | ①今までやった四つのちえの確認をする。  | ・今まで学習してきたことを本時で活用できるよう、一つ一つ答えさせながら確認していく。   | 前時のワークシート        |
| 展 開     | ②10段落目の内容を理解する。<br>③プリント学習<br>・ワークシートの四つのちえを切り取る。<br>・ちえが書かれている順序に気を付けながら一文読みをしていく。<br>・パズルゲームをする。<br>④一つ目から黒板上の巨大パズルを完成させる。 | ・この単元のまとめである段落であるということ把握させる。<br>*ここで机上には教科書・はさみ・のり・ワークシートのみを出すように指示する。<br>・これから行う活動の予測をたてさせ、どう読み取っていけばよいか考えさせる。<br>・読んだことを思い出しながらパズルを並べさせる。<br>*一人ずつ前に出させ、組み立てさせる。 | 本時のワークシート<br>パズル |
| ま と め   | ⑤完成したパズルが正しいかを再度教科書を読んで確認する。   | ・全員で群読させる。   | たんぼぼの写真          |

に気を付けて整理することはできたか。

本時では、興味がそれないようにしなくてはという心配は必要なかったようである。

パズルと書かれたワークシートを配った瞬間の子どもたちの反応はとても良かった。はさみやのりで遊んでしまう子は一人もいなかったのである。そして、毎時間授業に参加できずにいた、LD（学習障害児）の児童が、前に出て三つ目のちえのパズルを組み立てたいと言ったのだ。これには、とても感動した。答えは正解だった。みんなの喜ぶ顔、そしてなによりも、その児童の嬉しそうな顔が、今でも思い浮かんでくる。この授業は、国語科にあそびを取り入れることは、子どもたちに興味を持たせる効果があるのだということを証明できるものである。

### 第3章 国語が好きになる授業実践に向けて

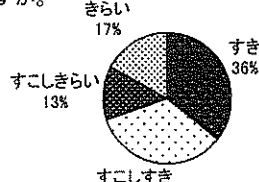
これまで国語科にあそびの要素を取り入れた授業について、教育実習で実践できたことを述べてきたが、次に児童の国語に関する意識調査を行い、あそびを取り入れた授業をした後、意識の変化は見られたかということについて述べていく。実習校にご協力をお願いし、2学年対象で研究を進めていくことにした。実習校の2年生は、1組25名、2組24名の2クラス合わせて49名である。私が教育実習した時にお世話になったのは1組であったが、今回は1組と2組の2クラスで調査させていただいた。

#### 1. アンケート調査（1名欠席につき48名中）

まず、2学年対象の国語に関する意識調査を行った。児童の国語の好き嫌いについての調査である。授業をさせていただく以前にアンケートを行った。その内容と結果は以下の通りである。

Q.1 こくごのべんきょうはすきですか、きらいですか。

すき……19人  
 少しすき……18人  
 少しきらい……7人  
 きらい……9人

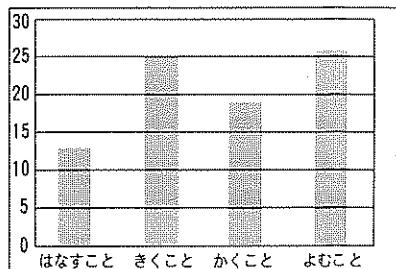


Q.1の結果を見ると、「すき」「少しすき」を合わせると、全体の70%を占め、「少しきらい」「きらい」を合わせた方は30%である。私の実習校の2年生では、国語が好きという児童の方が多いうことが分かる。

まず、国語が好きという児童について、その主な理由は何か答えてもらった。

Q.2 Q.1で「すき」と「少しすき」とこたえた人にききます。なぜ、こくごがすきなのか。(複数回答可)

自分のいけんをみんなにはなすことがすきだから……13人  
文しょうやものがたりをきくことがすきだから……25人  
文をかくことがすきだから……19人  
文や本をよむことがすきだから……26人



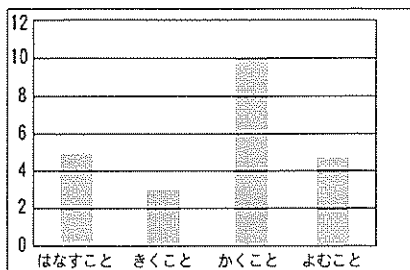
この結果を見て、国語が好きだと答えた児童の

理由について、心理的な要因があると考えた。まず、読むこと、聞くことは児童にとって、受動的な活動であると言えるのではないだろうか。そして、書くこと、話すことは児童にとって、能動的な活動であると言えると考えられる。このことから、国語が好きな児童であっても、自ら意見を考え出す学習よりも、既に作られている文章を読むことや、話を聞くといった受身的な学習の方が好きだという児童の方が多いうことが言える。

次に、国語が「少しきらい」「きらい」と答えた23人の児童に、なぜ国語が嫌いなのかを答えてもらった。この調査をする前に、私は、国語が嫌いだという児童の理由に「おそらく、一つ多いものがあるだろう」と予測していた。そして、それはどれかも見当がついていた。結果は、やはりその予測通りであった。

Q.3 Q.1で「少しきらい」「きらい」とこたえた人にききます。なぜこくごがきらいなのか。(複数回答可)

自分のいけんをみんなにはなすことがきらいだから……5人  
文しょうやものがたりをきくことがきらいだから……3人  
文をかくことがきらいだから……10人  
文や本をよむことがきらいだから……5人



教育実習の時、小学2年生の文章を書く能力が、私が思っていたよりも低いと感じた。私は、この調査をするに当たって、書くことが嫌いだという答えが一番多いだろうと思っていたのである。次に、児童が苦手意識を持っている、「書くこと」について、考察していく。

## 2.「書くこと」に関する考察

書くことは、聞く、話す、読むという他の活動と比較して、高度の活動であると言われるが、それはおそらく正しいであろう。聞くことにも、話すことにも、読むことにも、それぞれの難しさがあることは、私たちが日常経験していることであるが、なおかつ書くことの難しさを、第一にあげたい。

なぜならば、「書くことの機能は、他の言語機能を基礎として成り立つばかりでなく、手段的にも、より複雑になっている」からである。また、書くということは、常に友人と会話ができるとか、文字が読めてその意味を理解することができるということにとどまらず、文章を書くことを通して、自分の思想や心情を表現する行為でもあるからである。「大人であれ、子どもであれ、まず、言語によって回りの世界を受けとめ、そして、受けとめたものに対する自己の感情を把握し、認識しながら表現していくわけである。これらの一連の流れが、表現の過程である」とらえているが、この過程の中で、我々は、さまざまな思考活動をし、さらに新しい認識を得ていくのである。言語化することによって、自己と自己をとりまく世界とをはっきりととらえ、判断し、分別し、把握し、思考力を育てていくわけであるが、それらの行為を、より深く、より豊かに、より正確に、そして創造的に行うためには、書くということが重要な意味をもって来るわけである。」

国語科の学習指導要領に、指導計画を作成する上で配慮すべき事項として、第3の1の(5)には次のように示されている。

(5) 第2の各学年の内容の「B書くこと」に関する指導については、文章による表現の基礎的な能力を養うことに重点を置くこと。また、文章を書くことを主とする指導については、第1学年及び第2学年では年間90単位時間程度、第3学年及び第4学年では年間85単位時間程度、第5学年及び第6学年では年間55単位時間程度を配当するようにするとともに、実際に文章を書く活動をなるべく多くしたり特に取り上げて指導したりすること。

これは、一週になおすと、第1・2学年及び第3・4学年では2時間から3時間程度になる。第5・6学年では1.5時間程度である。低学年で身に付けた能力を高学年において活用しながら、次への程度や段階を高めることになる。

書く活動において、ある事柄を原稿用紙に書く、いわゆる作文に限定するのではなく、読みの過程でノートに書くというような多様な活動も含むと考えるべきである。このような、読むことと関連付けた書くことの実践には、次の3つのパターンに整理することができる。

### ア.読んだ教材全体に関係付けて書く

教材文の前書きや後書きを書く、感想文を書くなどのように、教材文の話題や内容に関係のある文章を書く。



## イ.教材文の読みを深めるために書く

人物の心情の移り変わりを書く、読み取ったことを行間に書く、などのように、教材文を読み進める過程で、読みを深めるために書く。

## ウ.教材文の表現の仕方を取り入れて書く

教材文の文章構成を取り入れて書く、教材文の叙述の仕方をまねて書くなどのように、教材の文章の書き手の技能を自分の文章に取り入れて書く。

書くことは大切であり、意義のあることであるが、ねらいや計画もなく、思いつきで書かせれば良いというものではない。次に、留意すべき点において述べる。

## ①書くことに学習上の必然性と必要性がある

何でも良いから書かせるというのでは学習としては成立しないので、何のために、何を、いつ、どのように書かせるかということがしっかりしていなくてはならない。

## ②書くための意欲を持たせる

書くことを好きにさせることが望ましいわけであるが、実際には、なかなか難しいことである。せめて、嫌がらずに書けるよう育てたいものである。

また、書いたものを正しく評価したり、有効に生かすことも大切である。書きっぱなしにすることは、書く意欲を損なうことになるのである。

## ③書くための技能を身に付ける

どのように言葉として表現し、文章としてまとめあげていくかという技能が身に付いていなければ、やはり、途中で挫折してしまうという結果になりかねない。

以上のことをふまえ、児童の「書くこと」に対する苦手意識をなくすことを目指して、あそびを取り入れた国語科の授業を実践した。

## 3.登場人物になりきって手紙作文を書く

まず、授業を実践した教材『お手紙』（アーノルド＝ローベル作・絵、みきたく訳）について述べようと思う。この物語は、手紙をまだ誰からももらったことがないということで悲しんでいるがまがえるくんと、そんながまがえるくんをさりげない優しさで喜ばせようとするかえるくんの友情が軽快なタッチで描かれている。がまがえるくんの悲しい思いを知ったかえるくんは、自分からがまくんへお手紙を出そうと思いつく。がまくんに手紙が来ることへの期待を持たせようとするかえるくんの言葉は、主題研究の大切な部分である。がまくんを励ます一方で、手紙が届くのを待っているかえるくんの心にも注目したいところである。

この物語は、手紙作文をするのにとても適した教材である。アンケートの結果から、実習校の子どもたちに「書くこと」を楽しんでできるような授業展開を考え、実践した。

## 第2学年国語科学習指導案（省略）本時の指導

### 手紙作文を書こう 『お手紙』

#### (1) 本時の目標

かえるくんの気持ちを考え、がまくんの立場から友情を深める手紙を書くことができる。

#### (2) 展開

|             | 学 習 活 動   | 教 師 の 支 援  | 資 料                                       |
|-------------|---|--|---|
| 導<br>入      | ①『お手紙』の役割読みをする。<br>(かえるくん役・がまくん役・かたつむりくん役が各一名、地の文が三役以外全員で群読する)                  | ・インタビューになり、三役の児童にどんな思いで音読するかを尋ねる。<br>〔自分のねらいを発表させる〕  | 三役のお面<br>インタビュー用の<br>マイク                  |
| 展<br>開      | ②がまくんになって、かえるくんへの返事の手紙を書く。<br><br>③書き終わった児童から切手を貼り、あて先（「かえるくんへ」）を書き、ポストに手紙を入れる。 | ・かえるくんへ返事の手紙を書くことで、がまくんの喜びとかえるくんの友情、思いやりを再確認させる。<br>・書けない児童にはお手紙をもらったときのがまくんの気持ちを考えさせ、それを書かせる。<br>・かえるくんへの手紙が書き終わった児童には、他の登場人物や自分の友達や先生や家の人など、相手を決めて手紙を書かせる。 | かえる型<br>便箋<br>切手（シールを使う）<br>ポスト<br><br>便箋 |
| ま<br>と<br>め | ④ポストの中から選び出された手紙を書いた児童は、その手紙を発表する。  | ・何人かの児童に読ませる。＊発表者以外の児童は正しい姿勢で聞かせる。   | ポスト                                       |
| 発<br>展      | ⑤がまくんとかえるくんが登場するアーノルド＝ローベルの他の作品を読む。   | ・『ふたりはともだち』（文化出版局）の中から「おはなし」を読み聞かせる。<br>＊机を下げさせ、挿絵が見える所へ集まらせる。   | 『ふたりはともだち』                                |

#### (3) 評価

がまくんの気持ちをよく考え、かえるくんへのお手紙を自分の言葉で書くことができたか。

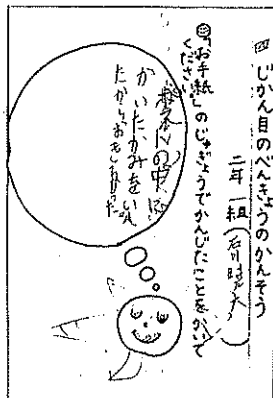
1組と2組で、同じ内容の授業を2回実践することができた。2クラス共通していたことは、お面をつけて役割読みをする際、かえるくん、がまがえるくん、かたつむりくんの三役をやりたがる子が多かったということである。アンケート調査でも、文や本を読むことが好きと答えた子が一番多かった。役割読みをした子どもは、どの子も緩徐を込めて読むことができた。

右のプリントは、この授業が終わった後に、子どもたちに授業についての感想を書いてもらったものである。ポストに手紙を入れるのが楽しかったということを書いてくれた子が他に4人いた。書いた手紙作文をただ教師に提出して終わるのではなく、楽しめる活動を取り入れれば、書くことが苦手な子でも書く意欲が湧くのではないかと思う。

#### 終章 国語科の中にあそびを

『お手紙』の授業後に子どもたちに答えてもらった感想について集計してみた。結果はこうになった。

たのしかった……20人



よくわかった……1人

おもしろかった……13人

うれしかった……3人

ポストにいれるのがよかった……5人

むずかしい……2人

その他……5人

全ての子が楽しめたというわけではないが、国語を嫌いだと答えた児童16人も含め、楽しかった、面白かった等と感じてくれた児童が46人いたのである。約5ヶ月振りに授業を行ったということで、いつもと違った授業に新鮮さを感じ、そのような感想であったのかもしれない。しかし、私は、国語科の中にあそびを取り入れることは、子どもたちを国語好きにすると確信している。教師のちょっとした工夫に、子どもたちは敏感に気づき、楽しむ心をいつでも持っているのである。

留意するべき点として、教師は、毎回あそびを取り入れないようにすることである。毎回の授業の中にあそびを取り入れてしまうと、面白さに感動することのないただの遊びになり、教科書の文章に返ることができなくなるといったような、国語の授業が成り立たなくなるという恐れがある。時々行われる、あそびを取り入れた国語科の授業を、子どもたちは心待ちにするようになるのである。私は、国語科教育にあそびを取り入れることを薦めたい。

参考文献 省略